2022年11月24日

中東フリーランサー報告

（第16回）

中東フリーランサー

<u>〈目　次〉</u>

１．すっぽかされた日本？

２．LINE プロジェクトの実像とは？

３．遂に FIFA 2022 開催！

―――――――＊―――――――＊―――――――＊―――――――

前号からの 1 か月半、中東に関係する政治イベントが続きました。まず 10 月 20 日にはトラス英首相が在任 45 日で辞任（右はその風刺）、相前後してイタリアでは右派メローニが初の女性首相に就任。10 月 23 日には習近平が異例の三期目に突入。11 月 1 日には今や年中行事のイスラエル総選挙が行われ、ネタニヤフが返り咲きました。レバノン・イスラエル間では 10 月 11 日に EEZ が合意されましたが、今後ネタニヤフがちゃぶ台返しをするかどうか要注意です。一方 8 日の米中間選挙では民主党が「予想外の」善戦をしました（とは言え下院は共和党勝利）。事前にはしゃぎ過ぎたトランプは面目丸つぶれですが、しかし 15 日には次期大統領選挙への立候補を鳴り物入りで表明し、相変わらず「攻撃は最大の防御」しかできない人格を再認識させられました。

重要な国際会議も開かれました。11 月 1・2 日には、コロナ禍で延期されていたアラブ連盟サミットがアルジェで開催されました（サウジアラビア、レバノン欠席）。11 月 6 日には、エジプトのシャルムエルシェイクで COP27 が開催され、20 日に閉幕しました。そして 15・16 日にはバリで G20、18・19 日にはバンコクで APEC 開催と続き、いずれもウクライナ戦争が直接間接に影を落としました。一方ロシアに近い側では、10 月 13 日にアジア相互協力信頼醸成措置会議なる曖昧な会合がカザフであり、続けて 11 月 1 日には上海協力機構の定期会合がオンラインで行われ、それを追うように 11 月 4 日、ショルツ独首相が VW、BMW、シーメンスなど独経済界を引き連れ訪中し、習近平と面談しました。（マクロンもフランス勢で同行を希望したが、ドイツが拒否）

以上の動きについてはメディア報道をご覧ください。また COP27 については別稿で考察することとし、今回はサウジアラビアとカタルについて報告致します。

１．すっぽかされた日本？

バリの G20 には MbS サウジ皇太子が出席しましたが、閉会後の 17 日そのまま韓国に向かい、「19 時間の訪韓」を行いました。「韓国・サウジ修交 60 周年」を記した公式訪韓で、尹錫悦大統領

にとっては初の外国公賓となりました。もともとは 1 泊の予定で、ロッテホテルの本館・別館 400 室を借り切ると言う、流石の豪快さでした。大統領と会見後、ロッテホテルに勢揃いした韓国財界の総帥一同と面談し、300 億ドルに及ぶ契約 26 件と MoU40 件を取り纏め、そそくさと「日本に向かった」と言うのが韓国中央日報の記事でした。いかに慌ただしかったかは、MbS から韓国側に「お土産を渡す暇が無いので、飛行機に取りに来て欲しい」との要請があったほどとのことでした。公賓としての訪韓にしては何ともドタバタ感があります。

実際には中央日報の記事は正確ではなく、MbS 一行が向かった先はタイでした。18 日からバンコクで開催される APEC にゲストとして招待されており、訪日はその後の 19 日で、21 日まで滞在すると NHK は報じています。滞日中の 20 日に岸田首相と会談し、21 日には「日・サウジ・ビジョン 2030 ビジネスフォーラム」が開催される予定でした。しかし、MbS は突如訪日をキャンセル、カタルに向かいました。20 日の FIFA2022 開幕式典にカタルから招待されていたのです（右写真：タミーム カタル首長と共に）。当然随行メンバーも来ず、「日・サウジ・ビジョン 2030 ビジネスフォーラム」も吹き飛んでしまいました。

ドタキャンの理由は明らかにされておらず、松野官房長官も記者会見で「「ムハンマド皇太子の訪日は何ら決まっていない。 日本は戦略的パートナーであるサウジアラビアとの関係を極めて重視しており、双方の都合の良い時期にハイレベルの訪問が早期に実現することが重要だ」と木で鼻をくくったような発言をしましたが、サウジアラビア皇太子、しかも今や首相でもある MbS の訪日応接が何ら決まっていないはずがなく、まるで中国報道官のような物言いに、「すっぽかされた日本」の困惑が透けて見える気がしました。

韓国は、MbS 訪日ドタキャンの記事を連発しましたが（一方日本での報道は少ない）、いつものザマミロ日本的な表現はなく、むしろ訪韓もキャンセル予定だったところを、敢えて訪問してくれたと特筆大書し、その功績を元喜龍国土交通部長官の外交努力に帰しています。元長官は MbS が主導する NEOM プロジェクトに焦点を絞り、経済界の「ワンチームコリア」を率いて 11 月 5 日から 6 日間にわたってサウジに滞在、アルルマイヤン PIF 総裁（アラムコ会長）、アルナスル NEOM プロジェクト CEO、エネルギー相（MbS の兄）、投資相、住宅相などとひざ詰め談判を行っています。これに応えて 10 日に訪韓したアルファリ投資相が崔昌源 SK ディスカバリー副会長、辛学チョル LG 化学副会長、張在勲ヒョンデ社長らと面談し、協力案件を事前調整したとのこと。こうした具体的成果が MbS の心変わり（訪韓決心）に繋がったようだと言うのが韓国側の主張です。

ロッテホテルでの「韓国・サウジ投資フォーラム」には、李在鎔サムスン電子会長、崔泰源SKグループ会長、鄭義宣ヒョンデ（現代自動車）会長、金東官ハンファソリューション副会長、チョン・ギソン HD 現代社長、李在賢CJグループ会長、朴廷原斗山グループ会長、李海旭 DL グループ会長ら、韓国経済界の総帥8人が出席し、前述の総額 300 億ドル契約調印と 40 件以上の MoU 締結の他に、アラムコが大株主のエスオイルが、蔚山に 70 億ドル規模の石油化学コンプレックス「シャヒンプロジェクト」への投資が発表されました。

今回韓国が集中した NEOM プロジェクトは、2016 年に MbS 皇太子が発表したビジョン 2030 の中核事業ですが、サムスンはサムスン E＆C やサムスン電子が ICT・建設インフラに、ヒョンデは建設とスマートモビリティーシステム、SK はグリーン水素などエコエネルギーと ICT 基盤事業にそれぞれ参加する一方、コーロンは砂漠で現地スマートファーム事業に進出し、水処理・風力プロジェクトを推進中とのことです。またハンミ（韓美）グローバルは NEOM 建設の PMO 契約を 2.3 百万ドルで既に受注しています。

と言うことで、MbS は韓国に大受注をばら撒き、日本には挨拶無しとなりました。訪日について尋ねた韓国政府側に対し、サウジ高官が「調整中」と述べたとの韓国側報道もあります。しかしこの期に及んでまだ調整中と言う有様に対して、既にドタキャンを決めていたのでしょう。韓国与党議員筋の話として、日本政府が岸田首相との会談の議題に、OPEC＋の減産決定への懸念表明を挙げたことがサウジ側の神経を逆撫でした結果と中央日報は伝えています。NHK が MbS 訪日を報じた際にカショギ事件に言及したことに MbS が激怒したからだとの SNS もありましたが、どうでしょうか。MbS はバリの G20 ではエルドアンと歓談し、マクロンとも握手し、さらにバンコクでもマクロンと再度面談するなどの親密ぶりを発揮しています。岸田首相もバリでもバンコクでも会えたはずなのに、何も報道されていません。やはりドタキャンは MbS 訪日アジェンダの政府間調整が失敗した結果なのだと推測します。

そもそも「来るかどうかもわからなかった」等と官房長官が「公式見解」を述べること自体が異様です。それはつまり公賓接遇準備はしていないと言うこと（韓国、タイは公賓待遇）。公賓でないと言うことは、3 年ぶりの来日でありながら、皇室との面談が無く、皇室好きの MbS がグレたと勘繰るのは考え過ぎでしょうか。ちなみにタイでは国王が接遇しています。私が懇意の元外務次官から以前教えて貰ったのは、こうした国王級の来日に当たっては、外務省はまず皇室の日程を押さえるのが最優先事項とのこと。天皇の外国賓客接遇は年に 2・3 回しかできないので、奪い合いになるのだそうです。試しに宮内庁の天皇公式日程を見てみますと、11 月 17 日まではアップされていますが（ニカラグア、クウェート大使信任状捧呈式）、それ以後の日程は公開されておらず、それも上記疑念を深めた次第です。（ちなみにタイは、サウジアラビアが支援する問題多き「LIV ゴルフ」の競技会場も提供しています：蛇足）

2. LINE プロジェクトの実像とは？

さてその NEOM プロジェクトの中で今年 7 月に具体的な構想が発表され、話題となっているのが「The LINE プロジェクト」です。NEOM は皆さんご存じと思いますが、最近新たな読者も増えましたので軽くおさらいしますと、2016 年に MbS 皇太子がサウジアラビアの脱石油化を目指して発表した「サウジビジョン 2030」の目玉事業として 2017 年 10 月に突如発表され、その巨大さと奇抜さで世の度肝を抜いた大開発計画です。アカバ湾東側の砂漠・山岳地域を含む 26,500 ㎢は、ベルギーに匹敵し、海岸線は 468 ㎞、山岳地帯は標高 2500m に達しますが、人工的な開発は 5%に留め、残りの 95%は自然を保全する由。開発総予算は 5,000 億ドル。半分を外資に期待すると言うものです。ちなみに今回の韓国の諸契約は、サウジ、中国に続いて第三位、全体の 13%を占めるとのことです。

では何故このような辺境にしたのかと言えば、スエズ運河を扼する交通の要衝にありながら不毛の地域をゼロから開発し、新産業と雇用（38 万人）の創生を図ると言う触れ込みなのですが、実はイランから最も遠い場所であり、かつイスラエルと国交があるヨルダン、エジプトと隣接することから、イスラエルも含めた対イラン安全保障体制確立の文脈で、いきなり国家間同盟と言う刺激的な形ではなく、フリーゾーンと言う準国家的存在で交流の柔軟性を高め、平和的装いで接近を図る戦略ではないかと私は理解しています。実際エジプトとは 2018 年 3 月に NEOM の一環として、対岸のシナイ半島南部の開発に向け 100 億ドルの合弁ファンドを設立しており、チラン海峡沖の島嶼をエジプトがサウジアラビアに管理を移牒するなど、両国の接近は進んでいます。

NEOM 構想発表の翌月、砂漠のダボス会議と言われる第一回「Future Investment Initiative」が開催され、その檀上で折からサウジ PIF と組んで「ビジョンファンド」を立ち上げたソフトバンクの孫さんが、太陽光発電事業を念頭に「私は皇太子殿下に太陽をプレゼントしたい！」とぶち上げ、MbS が歯を剥き出して喜んだのを今も思い出します。そのビジョンファンドも今年度に入ってから株式市況の乱調で収益が急降下し（右図）、473 社への投資で一時は 7 兆円を超した利益が「ほぼゼロになってしまった（孫会長）」と言う惨状ですが、この間にもサウジアラビアはサウジアラムコを始めとする国営産業の IPO を続々達成し、NEOM も

2024 年には IPO し、1 兆サウジリヤル（2660 億ドル）を調達すると MbS は意気込んでいます。

NEOM 構想の各事業の内、海上先端産業団地「OXAGEN」では交易ハブと新産業育成を目指し、山岳リゾート「TROJENA」では中東最大のスキーリゾートを開発し（すでに 2029 年の冬季アジア大会開催が無競争で決定済み）、紅海に面した海浜リゾート「OCEANX」では遂にアルコールも解禁するとの、まことに「画期的」な情報も伝わって来ています（これにはドバイのカジノ解禁情報も影響している模様）。現状は文字通り「砂上の楼閣」状態ですが、しかしこれらの開発図は、ドバイなどの先例から敷衍すれば、大体想像のつく高層ビルの森でした。

そんな中、今年 7 月に構想が発表された直線都市「THE LINE」が、ここに来て具体的な姿を見せ始めると、今まで湾岸でとんでもない建物を見慣れて来た目にも、そのスケール感も含めたユニークさには、さすがに唖然とさせられました。その全体像は LINE の HP でも見られますが、下記記事が案件の要約と、代表的な想像図を掲載していますのでご参考に供します。

サウジアラビアと NEOM が発表した全長 170km 高さ 500m の直線型高層都市〈THE LINE〉Saudi Arabia and NEOM have announced a 170km-long, 500m-high linear high-rise city called "THE LINE" | CULTURE | TECTURE MAG（テクチャーマガジン）

簡単に言えば、東西を横断する長さ 170 ㎞、幅 200m、高さ（標高）500m！？の細長いボックスの中に、900 万人を収容する都市を建設すると言うもので、表面が鏡で覆われた二対の壁に囲まれています。まるで「進撃の巨人」の城壁みたいですが、果たして片面で面積 85 ㎢に及ぶ鏡面に反射した陽光が、本来の陽光と重なり、砂漠にダブルホットゾーンを作ってしまうのではないかとか、渡り鳥は大丈夫かとか、標高 500m の長城が風向を遮ることになるのではないかとか、環境と自然への影響が心配になります。実際西側専門家の間では、その技術的実現性を巡ってかなり批判的議論が展開されていますが、その辺についての NEOM 側の回答はまだありません（下図は NEOM オフィスによる LINE イメージ図）。

イメージ図から推定すると両壁の厚さは 20m。山手線一輛の長さです。これに挟まれる 160m 幅の空間が 500m の高さで延々続くのですが、底に立ったら深い溝の中にいるような感じではないでしょうか。阿部公房の「砂の女」を彷彿させますが、その中に重層的な空間を展開することで、人口密度 26.5 万人を可能にする、と言うのが果たして現実的なものなのかどうか、正直私には判断できません。基礎土木工事は既に開始され、工事現場の状況と、完成予想図の比較を示す画像もありますが（下図）、完成形はこんな単純なものではないはずです。

ちなみに 170 ㎞長の LINE の西端はアカバ湾に面し、その対岸は COP27が開催されたエジプトの観光地シャルムエルシェイクですが、東端は砂漠の真ん中のオアシス都市タブークに繋がります。この一帯はヨルダンのワディラム砂漠にかけてハウェイタット部族の居住地（と言うか遊牧地）で、彼等こそ 100 年前の「アラブの反乱」の主要勢力として、アラビアのロレンスに従い、有名なアカバ攻略で活躍した誇り高い一族で、映画ではアンソニー・クインが演じました（写真左端）。タブークには当時ダマスカスからメディナまで通じていたヒジャーズ鉄道の駅があり、オスマン帝国軍の重要輸送拠点でした。この鉄道を爆破するシーンが、この映画のハイライトの一つです。それはさておき、そうした誇り高い部族ですので、NEOM で村おこしをと狙う向きよりも、建設計画による移住強制に抵抗する人々が多く、2 年前には立て籠もり事件が発生し、一人が治安部隊に射殺されると言う騒ぎとなりました。そして今年 10 月、その際に逮捕された中の 3 人に死刑判決が宣告されました（次頁記事ご参照）。MbS の NEOM 成功に向け

た断固たる姿勢を感じる一方、その手法はなんとも中世的で近未来的とは呼べません。（だからまだカショギ事件で絡まれる・・・）
Neom: Saudi Arabia sentences tribesmen to death for resisting displacement | Middle East Eye

3．遂に FIFA 2022 開催！

11 月 20 日、愈々FIFA2022（ワールドカップ@カタール）が始まりました。私には「ドーハの悲劇」が生々しく思い出されますが、しかしもう 30 年近くも昔のこと。今の選手達には日露戦争並みの話でしょうが、当時の日本にとっては、バブル崩壊の中、せめてもの明るい話題になるはずの「ワールドカップ初出場」が、実現まであとちょっとのロスタイム 17 秒でイラクに絶妙の同点ヘディングゴールを決められ、夢は霧散しました。深夜の TV に噛り付いていた国民の「あぁ“～！！」と言う絶叫は、海を渡ってお隣韓国（これで勝ち点同率となり、得点差でワールドカップ出場決定）にも届いたのではないでしょうか。

しかし当時、駐在先のテヘランから観戦に駆け付けていた同僚（サッカー審判資格保持者）から、「試合は終始イラクに攻められっ放しで、同点で終われたのが不思議なぐらい。悲劇だなんてとんでもない。」との、極めて冷静な批評を聞いて、サッカーに疎い私はそう言うものなのかと思った次第でした。今や開幕目前にして、TV ではドーハの悲劇の最後のゴールシーンばかり繰り返し放映していますが、この敗戦（引き分けですけど）はミッドウェー海戦の「運命の 5 分」と同じく、そこだけを見ていればアンラッキーのように映りますが、全体で見れば違った評価になって来ることを、同僚の言葉を思い起こして、よくよく戦略的な視点であることを再認識した次第です。敗戦（引き分けですけど）からの教訓こそが立ち直りに繋がる近道なのですが、この点では日本サッカー界と日本海軍の辿った道は大きく分かれました。

（注；本稿作成中の 11 月 23 日、日本はドイツを破り、今度は「ドーハの歓喜」となりましたが、戦いは始まったばかりであり、まだ真珠湾攻撃成功のようなもの。まさに勝って兜の緒を締めよと言うべきなのでしょう。ドイツがボール支配率、シュート数、ゴール枠内シュート数いずれも日本の 3 倍であったのに対して、結果は日本の２－１。個々の評論は専門家にお任せするとして、日本の持てる力の発揮（戦術）が、勝利のシナリオ（戦略）にぴったりと噛み合った結果で、その采配をとった森保監督こそ、「ドーハの悲劇」の当事者として、最も感慨深かったのではないかと思います。）

さて、そうした純スポーツの世界とは別に、やっぱりと言うべきか、人権団体によるカタル批判（非難）が開会を目前にして始まりました。新聞でも報道されているように、人権団体ヒューマンライツウォッチ（HRW）によるキャンペーンです。彼らの主張と要求は①外国人労働者に対する不当労働行為の是正と賠償（スポンサー制度を含む）が中心で、FIFA 賞金と同額の 4.4 億ドルを賠償金として積み立てを要求、これに加えて②女性差別の撤廃、③婚外性交・同性愛への刑罰の撤

廃、④LGBTQ 差別の撤廃、⑤言論の自由の保証等となっています。HRW の主張は以下のサイトで詳しく述べられており、50 ページに及ぶレポートも付属していますのでご興味のある方はご覧ください。題名が「レポーターの為の報告書」となっていることからわかるように、FIFA2022 の取材に参集する各国報道陣に向けたアピールであり、FIFAおよびカタル政府そのものに対しては、糾弾・要求のレベルを超え、まさに断罪しています。

https://www.hrw.org/news/2022/11/14/qatar-rights-abuses-stain-fifa-world-cup

こうした中、大会アンバサダーの元カタル代表ハリド・サルマンがドイツメディアのインタビューで、「同性愛は精神の傷だ」と発言したことが火に油を注ぐ形となりましたが、彼にしてみれば飽くまでも「同性愛はハラームだ」と、イスラムの教えに基づいた発言をしたに過ぎず、何故非難されたのか、ご本人もわかっていないのではないでしょうか。実際イスラムの教義に基づけば、彼は間違ってはいません。しかし、こうしたナイーブさを発揮し、欧米の反発を呼んでしまうところには、カタル人の純粋さと強引さが同時に剥き出しになり勝ちな不器用さを感じます。

そもそも FIFA2022 については、10 年前の開催地決定を巡って、投票権を持つ FIFA 幹部に対するカタルの買収疑惑が取り沙汰され、米司法局が告発する一方、そもそもあの「クソ暑い」カタルの夏にどうやって開催するのか、と言う疑問が噴出したものです。当時ドバイ駐在の私も、新エネ活用の冷房方式を取り入れたモデル競技場（テニスコート程度の大きさ）を建設展示した英国の Arup 社（当時三井物産と関係あり）を訪れたり、ドーハの都市計画事務所で英国人監督に話を聞いたりしたものですが、その監督がドバイからドーハに「通勤」（もちろん飛行機で）していたことを知るに至り、ドーハの住環境についての彼らの評価をはしなくも痛感した次第です。

結局開催時期はその後の交渉で 11 月に後倒しとなり（2015 年）、冷房問題については多少緩和されたのですが、開催中は欧州主要リーグを敢えて中断までするこの決定を巡って、これまた疑惑を招きました。しかしその当時、話はそれ以上大きくはならず、巨大なスタジアムや社会インフラの建設が続きました。それが世界の耳目が集まるこの時期になって、突然大声を挙げると言うのは、いつもの人権団体の行動パターンかなぁ、と言う気がします。案の定、選手団の一部では同調の動きも見られ、主催者をハラハラ（イライラ）させましたが、いざ試合開始となるとメディアの目は勝敗の行方に集中してしまっており、世界的なボイコットの声は試合の喧噪にかき消されそうです。カタル側が混乱を防ぐ為と称して、大会直前に会場周辺の禁酒（ビール販売不許可）を指令するなど、俄かに引き締めを強化した背景には、不測の事態に対する懸念もあったのかも知れません。この土壇場の禁酒令は首長家からの厳命で問答無用だったとの NYT 報道もあり、実はもともとカタル首長家の本心はこれで、スポンサーの手前土壇場まで黙っていただけとの観測を聞かされますと、私などはこのやり方こそアラブっぽいなと、変に納得をしてしまいます。ただし FIFA に 7500 万ドルもスポンサー料を払ってきたバドワイザー（アンハイザー・ブッシュ社）は、さぞかし怒り心頭のことでしょう。（ノンアルコールビールは販売可能だが）

砂漠と海に囲まれた小国カタルは、陸の国境はサウジとの狭く辺鄙な国境だけで、護りには好都合です。開催中の入国には入場チケットにリンクする Hayya Card（ハッヤカード：右写真）の取得が義務付けられており、自国人以外はこのカード無しでは入国できません。ちなみにハッヤカードは単なる証明書の類だけではなく、次の付加価値機能があり、カタルの DX 先進性も感じます。

- カタル入国ビザとしての機能
- スタジアム入場時にチケットと一緒に提示
- カタル国内の新型コロナ関連アプリ「Ehteraz」アプリとの統合機能
- 公共交通機関（メトロ・シャトルバス）の無料利用
- 専用アプリと IC チップ付きカードの両方利用可

正にプラチナカードですね。

人口 290 万人とは言ってもカタル国民は 33 万人しかおらず（23 区で 11 位の北区並み。それともフランスのニース並みと言った方が良いでしょうか？）、これに来場者 150 万人が押し寄せるとなると、さすがに自分達だけでは警備が心許なく、トルコから官憲 3000 人、さらにパキスタンからも来援を受け、警備に万全を期すことになりました。ただこれら助っ人が自国の基準で警備行動すると、これまた別の騒ぎにならないかと心配にもなります。私がバーミンガム大学にいた時、教授から「ラグビー観戦はジャケット着用を勧めるが、サッカー観戦は防弾チョッキ着用を勧める」と、半ば冗談の警告を受けたことを思い出します。

これに先立つドバイ万博も、労働者の待遇について欧米の批判記事が横行しましたし、かつては世界最高層のブルジュカリファ建設中に労働者が待遇改善を求めて蜂起した事件もありました。しかし今回ほどの強烈な批判キャンペーンには至りませんでした。万博はイベントの期間が長く、サッカーのような勝ち負けの要素も無いため、メディアの注目度が持続しにくかったと言うことがあったのかも知れません。メディアをレバレージして騒ぎに繋げると言う人権団体の作戦ですが、結局その効果は期間限定。祭りが終わってしまえば後はどうなるのか。カタル政府の狙いもそこではないのかと思います。

逆に言えば、FIFA2022 はそれほど世界的インパクトが大きく、小国カタルがドバイを上回るイベントで歴史に名を轟かせるということは、国運を賭けるに相応しい大事業であり、総建設費 2000 億ドルも惜しくはない額なのでしょう（最近のカタルの GDP は 1700 億ドル前後）。例のカタル断交四か国が、一時これを召し上げようとした動きが噂されたことも、今となっては理解できます。

今は FIFA2022 の無事終了を祈るばかりですが、この一連の報道の中で、HRW の報告書（告発書？）もそうなのですが、外国人労働者を「移民労働者（migrant labor）」と記しているのには強

い違和感を覚えました。彼らは米国の不法移民とは訳が違い、移住目的ではなく、その希望も権利もありません（我々日本人駐在員も同じです。あのガース一議員も・・・。）。そもそもカタル国民ですら最終立法権はなく、正に絶対王政なのであり、これがけしからんとなるともう議論になりませんが、人権団体にとってはおかまいなしなのでしょう。カタル人 33 万人に対してインド人 70 万人。在住者に市民権を渡したら、カタルは忽ちにしてインドの一地方になってしまうのです。

HRW が告発する 2010 年から 2020 年の 10 年間における南西アジア 5 か国の労働者だけで 6000 人余の死者と言う数字も、英ガーディアン紙記事の引用で、7 割は「自然死」とのことですが（3 割は労災？）真偽不明としています。同じく HRW が引用するカタル政府統計では同期間の非カタル人の死亡者は 15000 人ですが、国籍・年齢・性別等の内訳は不明で、ガーディアン紙記事との整合は取れないとしています。ちなみに 290 万人の人口中、南西アジア 5 か国の出身者は 6 割を占めます。と言うことは単純計算すれば非カタル人死亡者 15000 人の 6 割は 9000 人となり、その内の 6000 人が労働者だったと言う推定が妥当かどうかと言うことなのでしょうか。

勿論カタルも手をこまねいていた訳ではなく、最低賃金制を導入するなど改善を強調していますが、いささかパッチワークのきらいもあり、また在外の手配師のコントロールはできていません。カタルではありませんが、ドバイの労務者の惨状を告発した BBC 番組を見ると、取材対象は底辺のサービス労務者であり、それと高層ビルの映像を重ねる編集には意図的なものを感じました（もっともドバイショック時に日本のニュースステーションもビルの建設現場を映して「ドバイショックで破壊されたビル」などと紹介していましたが）。そもそもそういう姿勢ですから、欧米メディアが HRW の主張を鵜呑みにするのも頷けますし、それが選手団にも影響を及ぼしだしたことには、FIFA やカタル当局も頭が痛いことでしょう。その意味では HRW の行動は一定の成功を見ていますが、本来訴えるべき相手はインド政府のような気もしますが。

さて、この一連の騒ぎを前に、私は別の視点を持っています。国民の 10 倍近い外国人を受け容れて国の発展をマネージしている姿は湾岸諸国に押しなべて言えることですが、これら外国人の管理と便宜の為に、各国は e-Government 化を進め、UAE では公共サービスをすべてスマホ上で、しかも英語で受けられるなど（だから英語力必要）、外国人にとっての生活面での便宜は急速に改善されています。各国は自国人の雇用拡大に向け、自国人化を推進する一方、外国人の入国条件については、比較にならぬほど向上しています（一方で監視体制の DX 化も格段に進んでいる）。こうして外国人が大挙押し寄せ、自分らの欲望（収入）を達成し、やがて帰国していくのが「外国人労働者」であって、移民ではありません（悪徳手配師による搾取は各論です）。我が国の将来像を考える上でも、湾岸諸国の外国人への大胆な社会システム開放は大いに研究の対象にすべきものだと、私は強く思う次第です。話は FIFA2022 からずれましたが、今日はこの辺で。

以上